

このセラピーとはどんなものか、これを取り巻く状況はいかなるものかなどを知ることができた。国外での状況も少し紹介されており、より理解が明確にできた。各地の乗馬クラブや地域での取り組みの紹介や症例報告を主としたものが多く、特に、脳性麻痺などで体が十分に動かさず、加えて会話ができずコミュニケーションをとるのもままならないような重度の障害の方たちの症例が多く紹介されていた。

セラピーというと、精神的が強調されるが、身体的にも明瞭な効果を発揮するようだ。体が動かさない障害児は馬にまたがることで股関節は伸び、背柱は真っ直ぐになる。さらに、馬の歩行にあわせて三次元的運動が受動的に行われたので、結果的に治療対象者の筋肉が発達し、遂には歩行可能になるという。さらに、「ホースセラピー、特に RDA Japan の活動を中心に」という論文では、馬体格やその歩行時の振動などから、障害者へのセラピーに適切な個体を分析する研究が紹介されていた。

しかし、ホースセラピーには馬生産、繁殖、調教、セラピー効果の評価、指導者養成プログラム確立や資格化の検討など、課題山積であることも知った。とはいえ、乗馬が以前の敷居が高いものから、身近なものになる過渡期にあると実感した。馬を介して人と人をつなぐことのできるホースセラピーの今後に期待したい。

(文責 竹内)

ホースセラピーを含む動物介在療法は、まず、ヒトの医療の一環なので、主要分野は医学である。また、ヒトと動物の関係学がもう一つの基盤になっているので、畜産系から新興した動物応用科学や動物科学などが中心となっている。だから、本書の原案となった報文が「畜産の研究」で特集されていたのだが、その分、既存の獣医療に関わることは少ないかも知れない。実際、東京大学大学院獣医学専攻・局先生（比較病態生理学）の序を除き、本書執筆者に獣医師はいないようだ。しかし、前述した障害者セラピーに適切なウマの選定では、獣医解剖学や外科学などの守備範囲である。当然、ズーノーシス対策や動物の様々な生物学に準じた健康保持では獣医公衆衛生学も必須だ。したがって、これからのホースセラピーは、獣医学とより積極的に関わりを持つ必要性を感じた。また、前述のように使用動物がより多様化をすれば、野生動物医学も貢献していくことが期待されよう。それにしても、このような書を読むにつけ、つくづく思うのは、野生動物医学も、所詮、人間社会と決して無縁ではないと再確認されることである。ヒトとの関わりが嫌いだから野生の世界へ逃げこまれたような方には、大変、残念なお知らせなのだが。

(文責 浅川)



### 『乗馬の楽しみとホースセラピー』

及川 清編

2011年3月 養賢堂 発行

160頁

定価（本体 3,000円＋税）

竹内萌香・浅川満彦（酪農学園大学獣医学群）

人類史初頭、各帝国の勃興を支えた当時のハイテク武器、ウマは近代まで使用され、戦前の本邦獣医学もこの軍事的利用により発達した。その後は、高額の競走馬としてヒトの欲を一身に背負う一方、一部獣医学徒にとっては、ウマ診療専門獣医師は純粋な憧れの職種である。このように様々な側面を見せるウマであるが、典型的な家畜なので野生動物医学との接点はあまり無かった。しかし、本書課題の動物介在療法（バイオセラピー；本書9頁）では、鳥、ウサギからイルカ（たとえば、本書116頁）まで、非典型的な飼育動物が活用されていることから、我々もこのセラピーについて把握する必要性に迫られている。今回、浅川のゼミ生の1人、竹内に概要紹介と印象を語ってもらった。

（文責 浅川）

本書は障害者や不登校児のための乗馬、乗馬が人の体や精神に及ぼす影響、大学での専門教育状況など馬の動物介在療法についての論文・エッセイなど、「畜産の研究」上に特集として掲載された27本が1冊にまとめられたものである。乗馬セラピー（ヒポセラピー）という言葉を目にしたに過ぎない評者（竹内）も、